

ときランニング部の応援歌を作ってくれたことがあったが、どんな歌詞だったか記憶がない。」（昭和42年12月5日付「毎日新聞」県版）

同じく中学、大学で同期だった新聞嘉兵衛（静岡市本通り）の談話。

「厚一君は変人だった。中学時代はよく一緒に無銭旅行をし、東海道の旧跡を訪ねた。大学時代は東京の下宿を訪ねたが、昼は寝て夜起き出し、電灯を消してロウソクの火をみつめ、黙って一言も語らずに一夜を明かしたことがよくあった。それで一人は満足した。」（「毎日新聞」県版・昭和33年2月24日付）

▽大正3年（1914）

10月・静岡市鷹匠町の家の東側を「ドウ川」と呼ばれる川が流れていた。その橋上に立つ和服姿の厚一。（6頁写真参照）写真の裏に「大正三年十月写」とあり。他の人物の推定年齢からも裏書は正しいと思われるが、不審なのは厚一の頭髪が長いこと。当時中学生はすべて丸刈であったと思う。

▽大正4年（1915）

3月・県立静岡中学卒業。

東京麻布我善坊町に、国許の親戚の者と家を借りて住む。学生3人に女中1人。厚一は、「紺飛白に袴をつけ鳥打帽をかぶり、板裏草履をはいて予備校に通う受験生」（「あの頃のこと」）だったが、すでに俳句を作っていたらしい。

7月・京都三高の入試に失敗。

11月10日・大正天皇即位大典。「郷里静岡の家に在って、正午のドンを合図に、父伊三郎と床の間に向って万才を唱える」と、「あの頃のこと」（作品52頁）に見える。滞郷数日で上京。我善坊の家解散となり、麻布市兵衛町に下宿したが、その家が、後に結城史耕の家と判る。古本屋で「ホトトギス」を漁り、ホトトギス例会に行き出し、瓦全、樹人、花因等と知り合う。

●赤坂（付田端）時代（大正5年～10年）

▽大正5年（1916）

7月初旬・はじめて赤坂丹後町の曲水吟社の例会に出席。渡邊水巴に初対面。

7月中旬・三高入試受験のため京都へ。不合格。

9月・再び受験生活に入るべく上京。赤坂区新坂町八二北村方に止宿先を移す。（ここに大正9年田端の海国少年社に移るまで居た。）進学先を私立大学に変える気持が動いていた。上京の翌日、水巴宅へ挨拶に出向く。

18日から毎夜曲水吟社臨時句会が丹後町水巴庵でひらかれ、小田島樹人と共に十夜にわたる「連夜吟」前後2回を欠かさなかった。（この時のことを俳誌「曲水」（1-1）に「苔雨、よしを、地球子、長頸子、樹人君らは熱心なものだ」と水巴記す。又青木よしをの回顧録には、「この会で苦吟を重ねたことによりわれわれの俳境は一段と進歩した。『曲水』創刊後、苔雨、よしを、長頸子、樹人の4人と後に杏銭子が加って寒燈吟社の結成となり、創刊時の『曲水』の活動に、芸術上又は事務上の